九月号
発行所 財団法人 全日本仏教会
東京都中央区築地三ノ一(本願寺内)
電話 (541) 0311-3
振替東京 三E100
発行人 栗本俊道
編集者 別所弘因
印刷所 ルンビニ社

花・と・彼・岸

紀野一義

永らくアメリカに禅風を鼓吹していられた鈴木大拙先生が初めて帰朝された時のことである。一日先生は、東大の印度哲学研究室に仏教の専門学者ばかりを集めて、講話をされた。その時先生は、

「人間はみな、現実に深い関心を持つている。しかし、これに近付き、これを手に入れるためには、般若の智恵で見るということが必要だ。般若の智恵で見るというのはどういうことかというと、」

と、先生は机上の花瓶を指して、

「これは花瓶である。しかし、これを花瓶だと見る時に、この花瓶と私との間に、花瓶とはこういうものだ、という先入観のようなものが入りこんでしまつている。それでは、この花瓶と私とが本当に一つになつているとは言えない。それでは現実を摑んだということにはならない。だから、花瓶を花瓶と見て、花瓶と見ない見方が必要である。」

という意味のことを話された。私はその時、思わず口の中で、

「花を見て花を見ず」

と口誦んでいた。そしてこの言葉は今なお私の心の中に強く生き、働いているのである。

花を見て花を見ない、それは、わが子をわが子と見て、しかもわが子と見ないということである。わが子を見た時に、私たちはやはり、自分が親であり、相手は私の生んだ子供であるという先入観で見るその先入観が邪魔になつて、子供を買い被つたり、猫つ可愛がりにして正しい評価が出来なくなるのである。「親と子はどちらが年上か」と訊ねると、百人中九十九人まで、「親が年上にきまつているじやないか、阿呆なことを聞くな。」と来る。ところがどつこい、それが先入観というものである。母親は子供を生むまでは、妻ではあつても母ではない。子を産んで初めて、産んだその子の母となるのである。産まれた時、同時に母となり子となるのである。だから母と子は同い年だということになる。先入観というものは実に抜きがたい執着であつて、自分の子に対してさえ、私は母親なのだとという意識で臨む。それでは、親と子がひとつになつて、子供の本当の命の姿を見るということは出来ない。だから、やはり、わが子をわが子と見つつ、しかもわが子と見ない態度を持つていて、初めて親子はひとつになれると思うのである。これが、花を見て花を見ない世界である。

この「花を見て花を見ない」心のすわりを、彼岸に結びつけて考えてみると、これは、「彼岸を彼岸と見て彼岸と見ない」ということになる。彼岸とは仏の世界である。私たちの理想の世界であるとも言える。迷つたり苦しんだりしている私たちの日々の生活をこちら岸とすれば、命のどつしりと座つた安らかな世界、迷いのない世界が彼岸、向う岸だということになる。この理想の世界である彼岸が向うの方にあると見ない見方が、花を見て花を見ない考え方である。彼岸ははるか向うの方にあるのではなくて、実は迷つたり苦しんだりしている日々の生活の中にあるということになる。

三年程前に私の所へデンマークとノルウェイの宣教師が訪ねて来たことがある。その日は夜遅くまでキリスト教と仏教について語り合つたが、その時、いろんな話の末に、神の天国と仏教の彼岸とは同じものじやないかと宣教師たちが主張し初めたのである。そこで私は、いやそれは全く違つたものだ、神の天国ははるかあなたにあるが、仏教の彼岸は私たちの歩いて行くうしろからうしろから拡がつて来るのだという説明をした。これは向うにあると見て向うにあると見ない考え方である。彼岸つまり仏の世界は、私たちが歩いて行くうしろからうしろから拡がつて来る。水の上を走る水すましのうしろにひろがる三角形の波紋のようなものである。そして、ある瞬間に、たとえばある人に自分の命のすべてをあずけてしまつたというような瞬間に、その人の命は飛躍的に転回して、今までうしろに拡がつて来ていた世界が、一時に前にも横にも上にも拡がつて来て、そこら中彼岸だらけになる。気がついたら仏のどまん中にいたということになるのである。だから、あなた方のいう神さまはるかな天国でおいでおいでをしているが、私の仏はうしろから背中を押してくれているようなものだと話したところ、宣教師たちは眼を白黒させて、それじや神の天国とは違うようだといつてしきりに首をかしげていた。この人たちは後に深く仏教に傾倒して参禅したりされるようになつたということである。

彼岸をはるかあなたにあると考えたり、高い世界だときめてかかるのは私たちの我執だと思う。はるか向うにあるものは、必ず私たちのうしろにある、足許にあると摑む行き方が六切ではないかと思う。もちろん彼岸はこちら側にあるのだから何もしなくても良い、そのままで良いなどと考えた吐瑞に、こちら側にはなくてはるか向う側に行つてしまつているということも起こる。西方浄土にしても、浄土はすばらしい世界だと思つた吐瑞に西方十万億土の彼方に消えてしまう。ところが、本気で生きる気持になつて足を踏み出せば、踏み出したところからもう浄土につづいているということになるのである。

このように、彼岸はかなたにあると見てかなたにあると見ない心のすわり方、花を花と見て花と見ない命のすえ方の中に、仏の世界、命のきらめく姿があると、私は信じているのである。(著者は宝仙女子短大教授)

全仏会長に会見を希望

年末来日のアルゼンチン大統領が

年末の十二月十日、日本政府の賓客としてアルゼンチン六統領フロンデシ閣下が随員多数を伴つて空路来日することになつたが、同六統領が在京中の十二月十四日午後一時より全日本仏教会会長と懇談したい意向なので、然るべく配慮されたいとの依頼が、過般外務省の儀典長より有つた。全仏では同六統領と会長との会見に万遺漏なきよう、すでに準備にとりかかつている。

阪神パークで釈迦展 全仏協賛

菊人形による「釈迦展」が産経新聞、六阪新聞、サンケイスポーツ主催文部省、印度大使館後援、全仏日印協会、六映の協賛によつて来る九月廿三日から十一月二十六日まで六十五日間に亘つて兵庫県阪神パークにおいて大規模に開かれる。これは広く青少年の思想の善導とアジア諸国との国際親善を目的として開かれるものであるが、釈迦の生誕から入滅までを菊人形廿八場面に構成し、随所に電動装置を駆使し幽玄な雰囲気を醸成すると共に平易に解説をつけると云う内容であり、その盛況が大いに期待されている。全仏もアジア各国から贈られた仏像十八点を会場にかざる。

昭和三十六年度

墓地問題特別予算を承認

京都で各宗々務総長会議開く

全仏では八月一日午前十時より京都西本願寺鴻の間において全国宗務総長会議を開催し左の要件について熱心に討議した、

協議題

一、墓地問題対策の経過並に現況について

会議は先づ太田理事長の挨拶にはじまり、現在仏教界の内蔵する問題の大きなものの一つは墓地問題である。今後も一層の御協力を願いたいと力強く述べた。次いで栗本局長が本願寺派武田達誓総長ら新任の総長を紹介、ついで全仏墓地問題国会対策委員長阿部竜伝師を一同に紹介し、終つて座長に武田本願寺派総長が選出され議事に入った。先づ第一議題について当局より栗本局長が立つて詳細な経過説明をなし長くともこの一年で墓地問題に終止符を打つべく全力を尽す覚悟であるから全仏教界の一層の御支援御協力を賜りたいと述べた。

二、墓地問題対策特別予算について

本件について昨年度の収支決算の説明と本年度予算（案）について栗本局長から詳細な説明がなされ、前年度同様、百万円予算を以つて本年度も墓地問題解決にピリオドをうつべく全力をつくす覚悟であるので御承認願いたいと述べ万場一致了承した。なお非常事態が発生した場合を考慮して予備費を若干増やしたら如何との意見があり、当局からそのような際には常務理事会等に計つて善処したいと述べ夫々了承された。

三、その他の件

全仏評議員会の日取りについては九月四日東京築地本願寺で開催する旨了承した。なお同時に旧境内地墓地返還問題、農地補償問題等についても一層の協力が要望された。

また全仏国際局から第六回世界仏教徒会議へ代表推薦方の依頼がなされ終って阿部竜伝墓地問題国会対策委員長より国会の働きかけについて各宗より委員を選出して強力に推進したいとのべられ夫々諒意を得た。最後に太田理事長よりの挨拶があり懇談に移り午後一時散会した。

当時出席者は、木村智広（新義真言宗）竹村教智（智山派）仲井義照（木辺派）山羽学竜（時宗代理）本霊禅山（念仏宗）若崎心哲（西山浄土代）野村宗春（浄土代）村上道隆（曹洞宗代）桜井顕光（高田派代）久山忍堂（相国寺派代）山口光円（天台宗代）岡崎円長（日蓮宗代）紫雲即忍（天台真盛宗）水谷瀲道（知恩院代）片山徳三郎（不受不施派代）森岡善暁（泉涌寺派）草津宜浩（大覚寺派）片側観叡（西山深草派代）訓覇信雄（大谷派）渡辺俊英（大谷派）吉田道稔（天台宗）虎山道五（南禅寺派）太田理事長、大村事務総長、栗本狩野、石川局長、別所、吉井、柳部長、相馬、鎌田主事

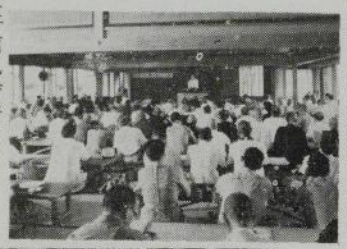
全国から三百名が集う

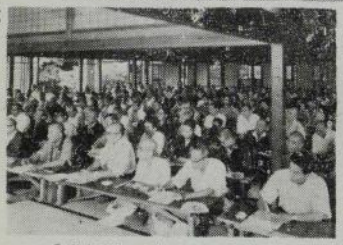
第六回全日本仏教講習会

盛況裡に閉講

全仏主催第六回全日本仏教講習会（旧中央講習会）は全国より約三百名の受講者が参集して、四国は香川県高松城跡玉藻公園披雲閣大書院において、七月廿九・三〇の両日に亘って盛大に開催された。

講習会第一日は午前九時半より全仏狩野組織局長が司会者となつてはじめられ、栗本総務局長の開会のことば、太田理事長の挨拶、地元の楠香川県仏会長の挨拶があり、直ちに講習会に移つた。





（講師及び熱心な受講者）

はじめに元京都大学文学部長、文学博士原随園先生の「現代に対処する仏教々学」と題する講演があり、受講者一同深く感鳴するところがあつた。昼食後午後一時半から東洋大学教授、経済学博士高橋梵仙先生による「仏教寺院の社会活動のあり方」と題する講演に耳を傾けた。午後三時からは全仏当局との協議会に移り、大村事務総長の挨拶に次いで石川国際局長、栗本、狩野局長から夫々所管事務についての報告が成され、質疑応答に入り終始活潑な意見の開陳がなされたが、特に新興宗教問題については各人からいろいろな意見が出され、全仏教界が打つて一丸となつて事にあたるべきことが申し合され午後五時終了した。

第二日は午前八時四十分開講され同十一時三十分まで約三時間余に亘って文部省専問委員、井上恵行先生の「新興宗教の実態について」の講演がなされ、三十五度と云う猛暑の中にもかかわらず、熱心に聴講し、一同期するところ大であつた。終つて直ちに閉講式に移り、受講者全員に対して大村事務総長より受講終了証が手渡され、午後一時頃閉講した。なお閉講式後、農地解放同盟香川県会長天野次太郎氏より農地解放問題についての話があつた。午後一時過ぎに大部分の受講者は屋島、栗林公園、善通寺、琴平等方面の観光へバスで出発した。琴平で一泊した受講者は翌三十一日朝食後解散し夫々帰省した。

お願

旧境内墓地返還について

寺院旧境内墓地返還（譲渡）に関する件については、先きの昭和二十二年四月内務文部次官通牒によつて新憲法の実施に支障なきよう地方公共団体所有の土地（旧境内地）についても、法律第五十三号の主旨に倣い、各寺院に無償返還（譲渡）せしめるよう、地方長官を通じて各市町村長に通達されたのであるが、未処理の為め更に昭和三十四年九月一日付自治庁行政局長の通達があつた。十四年を経た今日でも、なお未処理の市町村が全国にかなりある。そして本件が現在各市町村議会付託となつて審議の対象となつている。旧境内墓地返還をより一層スピーディに且有利に展開させるためには、昭和三十四年の通達に依つて解決処理された、**事例報告書**の提出が必要である。

全仏では過般昭和三十三年九月から本件の実態調査をはじめ国会請願等にのり出して来たのであるが従来通り無償返還されるために当該寺院においては早急に直接全仏へ又は各宗、各仏教会を通じて左記要項により事例報告を送られるよう強く要望している。

一、住所
一、寺院名
一、宗派名
一、代表役員名
一、処理年月日
一、処理要領（有償、無償）
一、処理坪数

以上

音楽による伝道を！

△レコード　三五〇円
「あゝこのよろこび」、裏面「のりのみやま」

▽**輪袈裟**（全仏制定）五百円

お申込は　全日本仏教会

現代に対処する仏教教学について

元京大文学部長
文学博士　原　随園

現代の世相というものは、今から申し上げるまでもなく非常に唯物的になつておりまして、更に現代人が非常に刹那的な生活の上に立つているようで、その上に生活する人間、そういう意識が非常に強い、これが、現代の特徴ではないかと思うのであります。

私の友人の奥さんが先日来られてこんな話をされた。

その長男が大学に行つておりまして、アルバイトに家庭教師をやつておりまして、お母さんが申しますには「よそのお子さんの学習を見てやるなら自分の弟の学習を見てくれてはどうか」と、すると長男の云く、「よその子供の学習を見てれば金をくれるが、自分の弟の学習を見ていたのではちつとも金にならない」と、母親があきれておりました。

でこれは現代の一つの傾向で、自分の能力を商品価するという世相の一端を示したものであろうと思うのであります。

そういう、唯物的な考えをもつている人達が自分の生活や、世の中というものを如何に長い目で見ているかというと、一向思慮分別のある長い目で見てはいない。

たとえば、スピードを出してはいけない、と云つているのに一たんの快楽を追つて、命が終ればあの世行き位に考えて、平気でとばしている。自分の生命を失うばかりでなく、他の生命を傷けるということに対しては一向に顧慮しない。

これは、極めて刹那的な生き方であります。このような自己中心の考え方というものは、単に個人的な生活ばかりではないのでありまして、国際的にもすべての現象が自己を中心として考えられているのです。

政党のいろいろな混乱にしましても、或は、二つの陣営に分れた世界の状勢にしましても、みな自己というものの立場だけを考えていると申して間違いないのであります。

第一次欧州戦争が終ろうといたします時に、アメリカの大統領ウイルソンは、十四ケ条の声明教書を発表しました。それは何か、というとつまり、戦争を終結するには、どういう条件で終るべきか、例えば、民族自決であるとか、無賠償、不併合であるとか、そういう形で戦争を終らせなければいけない、というのです。

この考え方は極めて合理的なものであります。ところが第一次大戦のベルサイユ条約というものは御承知のように連合国側がドイツに対する復讐の念にもえまして、ドイツが支払うことが出来ないような尨大な賠償をこれに課し、その植民地という植民地を悉く奪い去ってしまつた。

つまり、はじめ無賠償、不併合という、理想的な案をかかげていたにもかかわらず、現実としては極めて非合理なものとして終つたのであります。

これに対して当時フランス政府の責任者であつたクレマンソーが、後に申しますには、「あの時には、あのような結果をもつのでなければ、国民感情は絶対におさまらなかつた」と、つまり、問題の解決は決して人間の持つている理性的な解決に終つたのではなしに、何人もこれではいけない、とはつきりわかつているにもかかわらず、人間のもつている非合理な性格というものが、ついにベルサイユ条約というものを作り上げたのであります。これを見ましたあの作家のH・G・ウエルズは「あのような結果をもつのでは、人々は戦争の悲劇をまざまざと体験したにもかかわらず、二十年とたたないうちに又再びその悲惨な経験をくりかえさなければならないだろう」と申しております。

はたせるかな、第二次の世界大戦をわれわれは体験しなければならなかつたのであります。第二次大戦でようやくその前途が見え始めた頃ルーズベルトとチャーチルは大西洋において、いわゆる、大西洋憲章というものを発表いたしました。その大西洋憲章では一体どんなことをきめたかと申しますと、やはり民族自決、無賠償、不併合更に、海洋の自由、或は、世界資源の共同利用などを宣言しているのであります。

全く一つの合理的な戦争終結の案であつたといわなければなりません。

しかるにその実際の結果はどうであつたかというと、決して、無賠償、不併合でありません。海洋は少こしも自由ではない、李承晩ラインだとか、千島の漁業問題だとか、いろいろ起つています。世界の富を人類が、公平に平等に利用しようといつていますが、はたしてその通りになつているかというと実はそうではない。いうなれば、人間はこのように一面理性的判断をもつているにもかかわらず他面それと全く相友する現実というものが生れて来る。その原因は何かというと結局、人間のもつている非合理な性格というものに由来しているのである。この社会に少こしでもいい状態を現出しようとするならば、われわれのもつている非合理な性格というものを出来るだけ少くするように努力をすること、われわれのもつている合理的な精神を出来るだけ発揮するような方向に努力しなければならないと思う。

しからざれば、われわれのねがつている平和な、寂光浄土は出現しないのではないか。

しかも、現実はどうかというのに、そういうわれわれの非合理な生活を押えるような方向に対しては、ほとんど手をこまぬいている状態ではないかと思う。

何かことがあると、例えば少年が非行をすると、それは教育が悪いからだという。社会に不合理なことが起ると、それは宗教心が欠けているからだという。教育をさかんにし、宗教心をもり上げなければいけない、教育者も宗教家も何をしているのかという。そしてみな、尤もだ尤もだと合づちは打つておりますが、では自分たちが尤もだとしていることをどうしたら実現出来るかということについてほとんど反省をもつていないのが悲しむべき現状ではないかと思うのであります。教育と一口に申しますが、教育には二つの面があつて、つまり教というのはインストラクション、教えるということ、教えるとは、すでに経験したものが、そのたつといものを、まだ経験しないものに伝えること、これが教で、教という字は、子供にむちを加えるとかきます。文はいれずみで、つまりかざりです。結局人間の生活にかざりをつける、色どりをするこれが文で、子供にかざりをつけるためにはむちをも辞さない、すなわちむちをもつても自分の経験したものをまだ経験しないものに教えこむ、これが教育の教の面であります。

育というのは、英語のエデュケーションを訳しておりますが、エデュケイトとは引出す、という意味で、教育されるものが持つている価値、能力を引出してそだてるのがつまり「育」の面であります。

教育と一口に申しますが、教育にはこのように二つの面があるということを教育者は心得なければならないと思う。

戦前の教育は、教の面に重点がおかれていました。そのために子供の能力や価値などはほとんど考えず只つめ込み主義でありました。その反面戦後は、その反動として「育」の面が重視され、子供は野ばなしになつている。教などの面は先生が恐れをなしているのか、ほとんど教えようとしない。

私は、講義を致します時には、最初皆に起立させるのであります。そして一人でも起たないと挨拶しない。それで、私の講義の時間になつて、私が挨拶をしないと皆後ろを見たりして誰か、起立しないものはないかと注意する。私

はこれから講義をするのだ、私達はこれから講義を聞くのだという覚悟をもつて授業に入らなければ、こちらもみが入らない。みんなも何しに教室に出ているのかわからない。これから授業する時に挨拶を交わすのはこれは当然のことで、しかもそういう訓練は小学校の時からちやんと習つている筈です。高校になつたら委員が起立しなさい。礼をしなさいと云わなくてもわかる筈なんですが、それが大学に来たらやらんでもいいというわけのものではない。大学に来て忘れてしまつてもよいような教育なら小学校からやる必要はないのです。まあ私の授業はそうしてやつているのです。友人に聞いて見るとそんなことはやりませんよという。私がやるから仕方なしにやつているような気がするんで、これはやつぱり教育というものの躾がしつかりつみ重ねられ、その人自身がきたえられていないからだと私は思つています。

教育者というものはもつと自信をもつてやつてゆくべきではないかと思うのです。

われわれが長い間体験してきたものを、まだ体験しないものに伝えなければならない。それを本当にしこむのが教育者の責任ではないかと思うのです。

道徳教育ということが近頃やかましくいわれておりますが、これは当然のことであります。道徳とか、倫理とかいう言葉を分析してみますと、私たちの社会がまだ法律も何も持たなかつた時代に、どういう風にしたらお互の生活がよくなるかということ長い間にわたつてつみかさなつて来たそのつみかさねを私たちは慣習と申します。世の中から悪いものをだんだん排除して、よいものだけを育てていく、これがわれわれの生活の慣習なのです。

慣習をギリシヤ人はエイストと申しました。ローマ人はこれをモース、モーレズといいました。これを訳して慣習と申すのであります。そういうエートスという字からエフェックスという字が導き出されて来ているのであります。倫理という字はこの慣習から出ているわけなのです。モラルという字もローマ人のモーレズから来たもので、倫理道徳とは実にその民族の原初の段階から、その社会をよくしようとする体験の積み重ねをいうものであります。

そういう倫理道徳のうちから、まあ仏教の戒律にもありますように、こういうことはしてはならない、こういうことはしなさいという二つの面を決めたのがそれが法律なのであります。こういうものがわれわれの法律の母胎になっている。

いうなれば、社会をよくする慣習の中で、ぜひともこれだけはしなければいけない、これだけはしてはならないということをきめる。仏教でいう戒律もこういう精神のものであろうと思います。してはならないものだけを戒律のように思うのは間違いで、しなければならないことも教えた、それがつまり法律なのです。

よく「罪」ということを申しますが、われわれがつみとか、罪悪といつているのは一つしかない。日本人が罪、罪悪という場合その意味は一つである。けれども昔のギリシヤ人は「罪」という言葉の意味を三つ持つていたのであります。

その一つは法を犯す罪これをアデキヤと申しております。

第二は、あやまちを犯す罪でこれをハマルチヤといい、第三には神をけがす罪これをアセディアと申しておりますが、この三つの言葉を考えてみます時、一口に罪悪といつてもその内容はやつぱりこのように色々な意味を含んでいることが理解出来るのであります。しからば、われわれが一体罪として恐れ憎んでいるところのものは、これら三つの中のどれを指しているか、皆様と共に考えてみたいと思う。

普通われわれが罪悪と呼ぶところのものは第一のものではないでしようか。法律にふれないということ、ふれさえしなければ罪ではないという考え方、これは非常に危険な考え方であると思う。国会などで、こういうことをとりしまらなければいけないという法律案が出される、ところがこれがすぐに国会を通らない。すつたもんだの末、やつと通つたと思う頃には、この法律の対象になつている人々はすでに、この法律の上を行くような道を考えている。法にふれないで法律が禁止している行為を平気で行う道を考えているのである。そして、私は法にふれていないからといつて涼しい顔をしているのである。その根底にはやはり、法律にさえふれなければ自分は罪を犯したのではないという考えがあるのである。私はこういう考え方は非常に検討を要するものと思う。むしろわれわれが罪として法律を犯すというよりも、もつと注意しなければならないことは道徳に対する罪、あやまちを犯さないということではないかと思う。所が現在の人物批判におきましては道徳的欠陥についてはこれをいわないという条件付なのです。が、むしろわれわれは、慣習道徳というものこそ社会をよくするために守らなければならないものでありましよう。法律は倫理や道徳の中の最六公約数ですから、法律さえ犯さなければ世の中がよくなると決めることは、これ程間違つたことはない。むしろ、われわれが、条件付で罪人と云う罪を許すそのことをもつと重大な罪としておそれなければならないと思うのであります、この道理を教えないということは、これは私はもつての外であると思う。

しかし、よく考えて見ますと法律とか道徳とかいうものは結局、人間と人間との間柄を決めたものでつまり、われわれが生きている社会における人間同志のきまりであります。

そしてその生活というものは、ややともすると偽善的な、表面をつくろうようになりがちであります。

昔のギリシヤ人が第三のアセディヤ即ち神をけがす罪というものを大変重大な罪と考えた根拠、原因がここにあるのであります。御承知のソクラテスが、死刑になり毒杯を仰がねばならなくなつたその罪名は、何であるかというと、彼はアセディアの罪、即ち神をけがすものとして訴えられているのであります。つまり私達の善良な慣習というものは、人間対人間の行いさえ決定すればそれでいいというのではなく、更にその根底において、人と神、人と仏という超越者と対決する、そういう世界を心にもつて生活することが、絶対に必要であると思う。今、われわれが罪という時、少くとも現代の日本人で、神や仏に対して自已が責任を負わなければならないという罪悪感を持つている人はほとんどないのではないでしようか。

これは倫理道徳の世界ではなくして、全く宗教の世界でなければならない。

人間が絶対と対決する生活をもつということ、これが宗教の世界であると思う。

所が現在は宗教というものがほとんどない。無宗教の時代ではないか。私は先年、宇部の方に参つた時、中学の生徒をつれて、先生がやつてこられた。

そして、実は宿題が出してある。「宗教というものがわれわれの社会生活にどういう功罪があるか、どういう利益があり、どういう弊害があるかという宿題を出した。何か参考になる話をしてやつてほしい」

とこういうのである。で私は先生にこう申上げたのであります。「これは中学生には、非常にむづかしい問題です。おそらく、大人に対しても失礼だけれど先生方に対してこういう問題を出しても、容易に答えられないのではないか。しかし、折角来たのだからその人達に会いましよう」といつて私は一人一人に聞いたのです。

「君の家にはお仏壇か神棚がありますか」

すると皆あるという。

「それなら、そのお仏壇なり神棚にも礼拝することがありますか」

とたづねたところ、一人もない、つまり、われわれの生活の中で、絶対者と向い合うような、そう遺産があるにも拘らず、その遺産は全く消滅している。

で私はそういつた。

「あなたがたは、これから家にかえつて朝、晩にその仏壇、神棚に

向つておがむことを始めなさい。そして半年ばかりしたら、それがどんな意味があるか、又意味がないか反省してご覧なさい。それが答案になるのです」と少くとも現在の日本で、あなたの宗教が何かと問われて答えられる人が何人いるか。自分の家に仏壇がある、そこにおまつりしてある本尊は何であるか。そんなことは全く知らない。唯、先祖伝来こうだというようなことで過しているのではないかと思う。

私の先輩に浜田耕作という考古学者があります。戦争中に亡くなりました。大学総長という現職で亡くなつたので、大学葬にしたのです。所が、どんな宗教でやつたものかということで、お弟子さんたちが手分けしていろいろ調べた。すると、代々日蓮宗だということがわかつた。では日蓮宗でやろう、と決つた所に又報告が入つた。先生のお母さんは教会に行つていたというのです。では一番近いので、キリスト教でやるか、と決つた。そこで奥さんにどちらにするかと尋ねた。ところが丁度戦争中で神道がさかんであつたのであれでやつてほしいということになり、とうとう葬式は神道でやつた。

ところが、浜田さんは考古学者で朝鮮の方を研究している時、あの墓が面白いからというので八角の塔か何かを景色のよい所、東山の法然浄土宗に建てた。其処で式は高天原でやつたのであるが、遺骨は法然院におさまつた。

私は「浜田さんは今頃天国と極楽の間を往来しているだろう」といつて笑つたことがありました。が今の知識人というものがどういう信仰をもち、どういう神どういう仏と対決しながら生活しているかということを考えます時、慄然たるものを覚えるのであります。

全く信仰がない。むしろ、信仰をもつということ事態何か非科学的であるように考え、非文明的であるかの如く考えている。

私は実に情無いと思うのである。

例えば、岸さんが総理の頃にアメリカえ行つて、アイクとどこかでゴルフの試合をやるんだという。すると、日本の社会ではとうとうとしてゴルフが流行する。

又、浜口内閣の時であつたが、ゴルフなどは農地をつぶすのでもつての外であるというので、排斥されたことがある。

所が今は、農地法があるにもかかわらずゴルフ場はどんどん出来る。これは日本人が自主性がないからである。

こんど、池田総理がゴルフはやらないで、庭を作つているという。新聞に出ていたが、百貨店で庭石の展覧会がある。そしてそこには池田総理が秘蔵の庭石も陳列されているとある。

とにかく、庭石などを百貨店にもち込むこと事態どうかと思うが、上行えば下これにならうで皆やつている。

で私は岸さんの頃新聞にかいたことがありますが、岸さんでも池田さんでも、「自分は日曜には池上の本門寺にお参りするとか、築地の本願寺にお参りする」とかいつてくれたら、どうだろう利権をあさるような連中も総理に会いたい時は、信仰のあるなしにかかわらず、本門寺や築地本願寺に行かなければならないだろう。かりにそうだとすれば、ゴルフの棒をあちらこちら持ち歩くよりはよほどよいのではないか。池田さんが箱根に行く、そしたらそこえ、誰か禅師にでも来てもらつて話を聞く。そうすれば聞きたくなくても「わしにもぜひ」という人がたくさん出て来るにちがいないと思う。

少くとも、日本の社会をよくしようと思う人が、その人の私生活において常に神仏と共にあるという生活をくりかえしているならば、いわず語らずのうちに日本の社会が自己を内省するようになることうたがいないと思うのである。

私はそういう点から考えて、日本の現代の無宗教時代を非常になげかわしいと思います。あの有名なシュバイツェル博士、既に皆様御承知のドイツの神学者であり牧師でありますが、どうしても、世界の未開の地の人々を伝道しなければと思い立つてアフリカに行つてみると、はたして恵まれない人々がたくさんいる。そこで彼は医学をおさめ、今アフリカの奥地で、原住民の療養にあたつているのである。その彼が文明論をかいて、その中で現代の文明はおとろえている。それを立て直すには謙虚な、自己をなくした生活、倫理的なものがなければこれを支えることは出来ないといつています。

精神的なものの心要性を説く人の言葉をあげることは容易でありますが、これを現代と如何に結びつけるかは、われわれの課題でありましょう。

唯物論的な人々に向つて、信仰は大事だということをのみ説いても、それは偏向した道を辿るに過ぎない。そこにわれわれの考えなければならないものがある。仏教が日本で非常な発展をとげたということは、日本の社会のうごきと共に常に仏教が進展したからではないかと思う。

つまり現代の世相をどうしてよくするかというためには、どうしても倫理道徳を考えなければならない。

その倫理道徳のきゆう極においてわれわれは、身命を惜しまないという生活をしなければならないとするならば、われわれはもう一度現実の世相の中に足を歩み下ろしてみなければならない。

カポニリスというイタリヤの歴史家は次のようにいつています。

「われわれの社会は経済を基盤としている。しかし、それを規制するまのは政治である。けれども、これを運営するものは人間である」と、

これは傾聴すべき言葉でありましょう。

つまり、人間の創造する力、創造力というものが、凡ゆるものを運営してゆくのである、政治をよくするのも、人間の力によらなければならない。経済を運営するのも、それは人間なのだ。要するに人間がこれを支配するのである。これは一つの歴史の見方であります。マルクスの唯物論的な考え方からすれば、経済というものが一切の地盤であり、基礎なのである。政治の影響もうけるかもしれないけれど、どうしても経済というものが、その基礎となつていることは否定出来ない。したがつて人間は、好むと好まざるとにかかわらず経済機構、例えば社会主義体制ならその体制の上ではそのように決定されて行くものである。

これに対して、自由創造を説くものは、すべての人間の自由というものが、政治をよくし経済を進歩発展させるものだ。この自由論と決定論とが歴史を動かして行く考え方の両極端をなしているのである。

近ごろは、レジャーブームということがさかんにいわれている。レジャーとはリースからきた言葉で、その意味は開放される、ということである。例えば農奴という生活から開放される、それがリースで、では開放されてどうなるかというと、完全なる人間になるということで、しばられていた人間が開放されて自由になる、それがリースである。開放された時間、それがレジャーである。レジャーが世界的なブームになつているということは、どうゆうことかと申しますと、近代の社会が機械にしばられている、その束縛から開放されようとする人間の欲求のあらわれで、まことマルクスがいうように、現代の社会機構では個人はどうにもならない一つの生産機構に縛ばられている、その束縛から機械的でない世界に開放されること、つまり、人間が人間性を回復しようとする運動となつてきたもので、これは人間の精神的復活という点からいつてまことに結好なことでありましょう。しかし、これは一面からすると大変不思議なことであります。何故かと申しますと、レジャーということの意味がすでに申しましたように束縛からの開放でありますから、その意味でレクリエーションに行きなさいと、何万何千の人々が皆レクリエーションに出かけて、それぞれ満足を得ているわけで、少くとも物質的、機械的な味気ない生活から開放されていることはまことに結好なことです。

（以下次号）

異国の丘に故郷の香り

十六年ぶり　在ソ連日本人墓地参拝実現

全仏会長から弔慰文、香等を託す

厚生省が派遣する在ソ連ハバロスク、チタ両市日本人墓地参拝遺族団は全国から選出された遺族代表三十名、政府職員四名報道関係者十名の計四十四名で、八月十五日午前十時羽田空港発の全日空特別機にて現地に向い、彼地で十六年ぶりに英霊との涙の対面がなされ、盛大な追悼式が行われたが、全仏ではこれに先立ち柳部長、鎌田主事らが八月十一日厚生省に畠中順一援護局長を訪れ、六谷会長名による「弔慰文」(別掲)、花輪一対、香、散華等を手交し、現地へ携行してもらうよう依頼した。なお東西両本願寺からも花の種、お茶、線香等を同様委託した。また宮城県女川町の妙照寺住職鈴木錬成師も、全仏を通じて法華経写経二巻を夫々託した。

追悼のことば

謹んで全国七千万余の日本仏教徒を代表して第二次大戦によって異国の土と化されたハバロスク、チタ両市に眠る日本人墓地の諸霊に申上げます。

今を去る十六年前人類はその歴史上に拭うべきすべもない最も大きな惨禍を記したのであります。しかしながら今日、その惨禍の生々しい記憶は漸く遠く遙かな彼方へ忘れ去られようとしております。

諸霊よ、想えば永いあいだ御苦労様でありました。貴方がたが夢想だにしなかつたでありましようなつかしい父や母、兄弟が、いま現実に故郷の香りを双手に携えて遙々訪ねて来られたのであります冷いシベリヤの地に倒れた貴方がた、貴方がたはどんなにかこの日の来るのを待ちわびたことでありましよう。諸霊よ、どうか大慈大悲の仏陀に見守られ、肉親の慈眼に導かれて永遠に安らかにお眠り下さい。諸霊よ、私共は貴方がたの尊い犠牲が決して無駄でなかつたことを痛感するものであります。

祖国はいまや平和なそして立派な文化国家として他国に比肩し得る進展ぶりを示して来ております。

今遙かに貴方がたの散華の地に香を薫じ、花を捧げ、以て英霊諸氏の御冥福を祈念し、心からの弔慰の誠を捧げるものであります。

昭和三十六年八月十五日

財団法人　全日本仏教会
会長　六谷光暢

ハバロスク、チタ両市
日本人墓地諸霊に捧ぐ

世界仏教徒会議について

駐日カ大使より通報

概報の第六回世界仏教徒会議について今般駐日カンボジア大使シム・ヴアル閣下から次の様な書簡が全仏あて寄せられた。

謹啓、私は第六回世界仏教徒会議が本年十一月にカンボジアのプノンペンで開催される予定であることを御報告致します。なお組織委員会はすでに結成され右会議の諸準備に乗り出しており、日本へも近々招待状が送られるでしよう

インドネシア　仏教婦人来日

仏婦が歓迎会

八月二十二日午後十時廿二分羽田着のPA機にてインドネシアから、陸軍中将参謀次長G、スブロト夫人、貿易商社長マスフッド夫人、ハードジョトモ夫人(秘書役)の三人が来日したが、一行ほインドネシアにおける数少い仏教徒の中でも特に熱心なメンバーである。全仏では直ちに全日仏婦関東連盟に依頼し、二十四日午後三時から東京浅草寺伝法院において仏婦主催の歓迎お茶の会が盛大に催された。全仏から柳国際部長が出席し先年の同国における仏陀チヤヤンテイのときのお礼や、ジヤカルタ戦争犠牲者遺骨送還についての協力等について謝意を表し、旁々あいさつをした。

一行は二十四日夜大阪へ発ち、奈良、京都を旅行し、京都では特に各宗本山や有名寺院、庭園の見物をするなど「日本仏教」を視察して、九月五日帰国することになつている。

なお当日は駐日インドネシア大使館の夫人連や、日本インドネシア協会幹部、浅草寺五十嵐前執事長、仏婦の李方子副会長、米山久、船口暉子、赤松常子ら諸氏など役員四十数名が参席した。

ミコヤン副首相西本願寺へ

来日したソ連第一副首相ミコヤン氏は随員一行とともにこのほど京都西本願寺を訪れ、湯川総務らの出迎えを受け、両堂、白書院、飛雲閣等を見学し、終つて湯川総務と会見し「私は無神論者だが、神を信じる人を心から尊敬する」とのべ約三十分に亘り懇談して帰途についた。

米国の宗教事情視察に　大村全仏事務総長ら今秋出発

かねてより米国アイオア大学バッハ教授の招請により渡米するため選考中であつた米国宗教視察日本宗教界代表団はこのほど左の五氏に決定した。大村仁道氏(全仏事務総長、東京都議会議員)鴨宮成介氏(立正佼成会教学研究主任)三宅歳雄氏(金光教大阪北泉尾教会長)篠田康雄氏(熱田神宮権宮司)黒川直也氏(一灯園渉外室主任、通訳)

なお一行は十月廿七日空路出発し約四週間に亘つて米国各地の宗教事情を視察し、帰途ブラジルの宗教事情も視察する。

趙朴初氏全仏へ土産品

七月中旬開かれた世界宗教者平和会議へ中国代表として来日した趙朴初氏(中国仏教協会副会長)ら一行は、八月三日午後一時半に東京築地の全仏事務局を訪れ、釈迦牟尼如来絵巻一巻、中国芸術図録一巻をお土産品として持参し石川国際局長に手渡した。

静岡県仏婦夏期結集を開催

結成後三年目を迎える静岡県仏教婦人会では、八月廿五、廿六両日に出たり静岡県袋井市の可睡斉において夏期結集を開催した。

これは、釈尊の大精神にもとづき、混乱した世の中を少しでも明るくすることを目的とし、都塵を離れた聖地に結集して共に語り、共に磨き合い、社会に卒先して奉仕していこうというもので、特に若い人々の参加が注目された。

なお、講師として、宝仙女子短大教授の紀野一義師、前全仏総務局長佐瀬淳光師が夫々講演を行つた。

あとがき

○農地解放旧地主の補償問題は、その後農地被買収者問題調査会(会長＝工藤昭四郎氏)で調査対策を促進しているが、来年六月の期限を前に調査は行き悩みの状況にあり、政府与党で近く協議される模様である。対象地主は約二百十五万人。最近農地の転用が目立つて来ており、これは農地解放当時の主旨にも反し、転用の際には現在旧地主の承諾をも要せず、今日旧地主の生活困窮者が出るに至っては、著しい矛盾がある。『調査会は旧地主の生活状態を調査するだけでなく、補償を前提として買収当時の状況、解放農地のその後の処理状況などまで調査すべきである』との一方に意見もある様である。

○旧境内墓地返還については、昭和三十四年の通達に基く各地方の処置事例が、今後の審議を受ける寺院を有利にさせる為にも重要な参考資料となるので、該当寺院は処置要領を本会宛御報告願えれば未処理寺院にとつてこの上もなき幸せである。協力して欲しい。

○四国高松に於ける仏教講習会には、地元の積極的な協力により盛会裡に終了した。その蔭の底力たるや誠に威大なるものがある。今日を機に香川県仏の正式加盟を心より慶び、より一層の団結と研修を祈りたい。

○今月号から本紙題字を書家の豊道春海先生にお願いしました。紙上より厚くお礼申上げます。

(T・K生)